

第2章

札幌市の概要

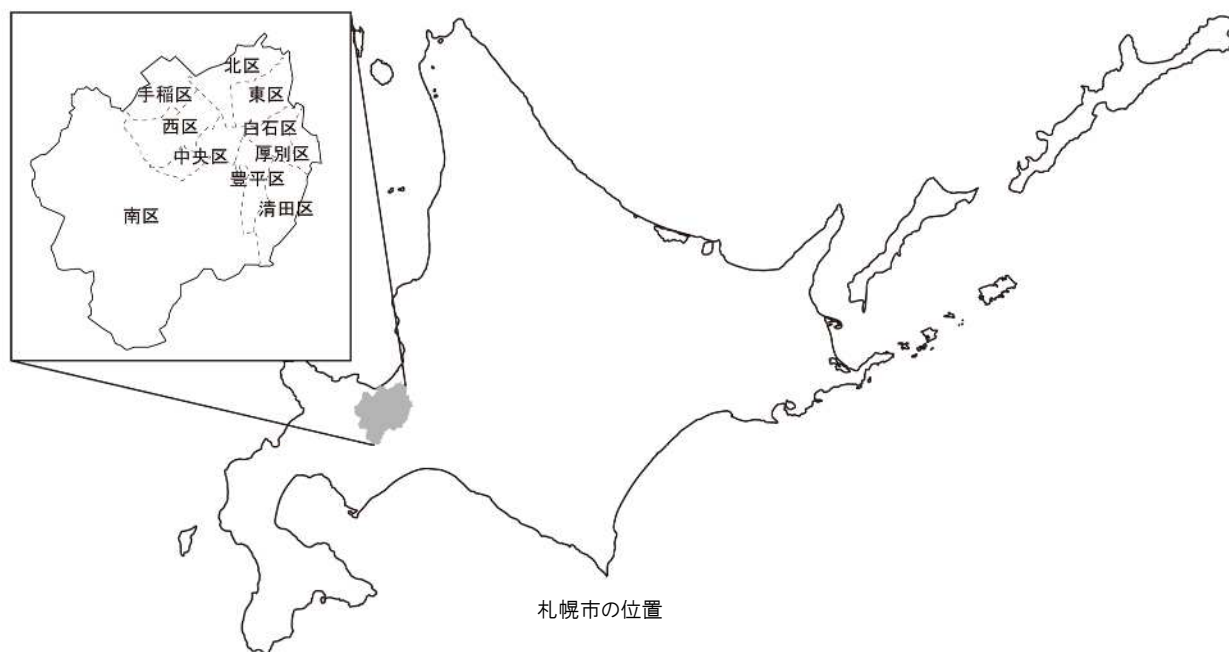
第2章 札幌市の概要

1 自然環境・地勢

(1) 位置

札幌市は、北海道の石狩平野南西部に位置しており、市域は東西が42.30 km、南北が45.40 km、総面積は1,121.26 km²で、これは、東京23区を合わせた面積のおよそ2倍にあたります。また、東経140度59分から141度30分、北緯42度46分から43度11分に位置しており、世界でほぼ同じ緯度に位置する都市には、ロシアのウラジオストク、フランスのマルセイユ、イタリアのローマなどがあります。

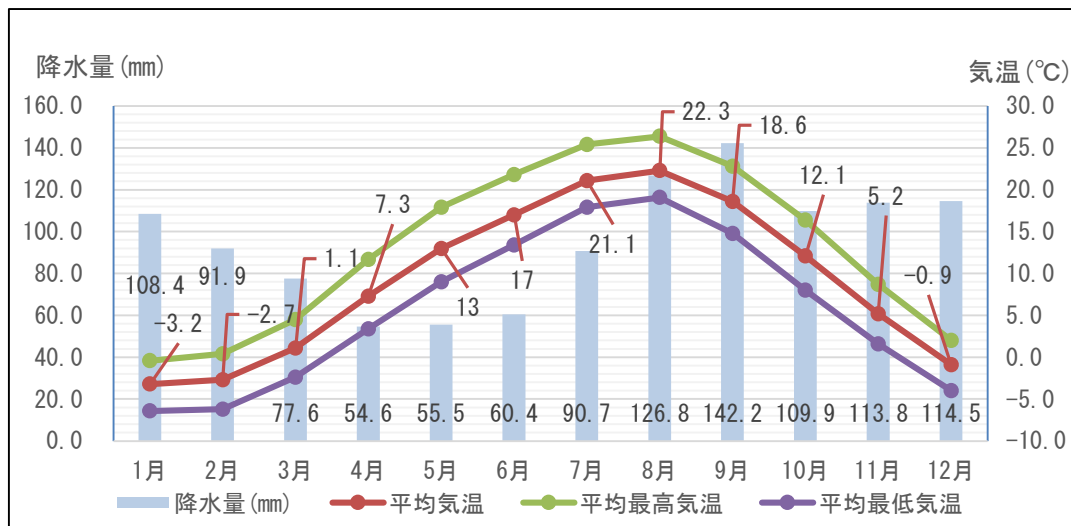
現在、札幌市と境界を接する市町村は、後志管内小樽市、赤井川村、京極町、喜茂別町、胆振管内伊達市、石狩管内石狩市、当別町、江別市、北広島市、恵庭市、千歳市の計7市3町1村です。



(2) 気候

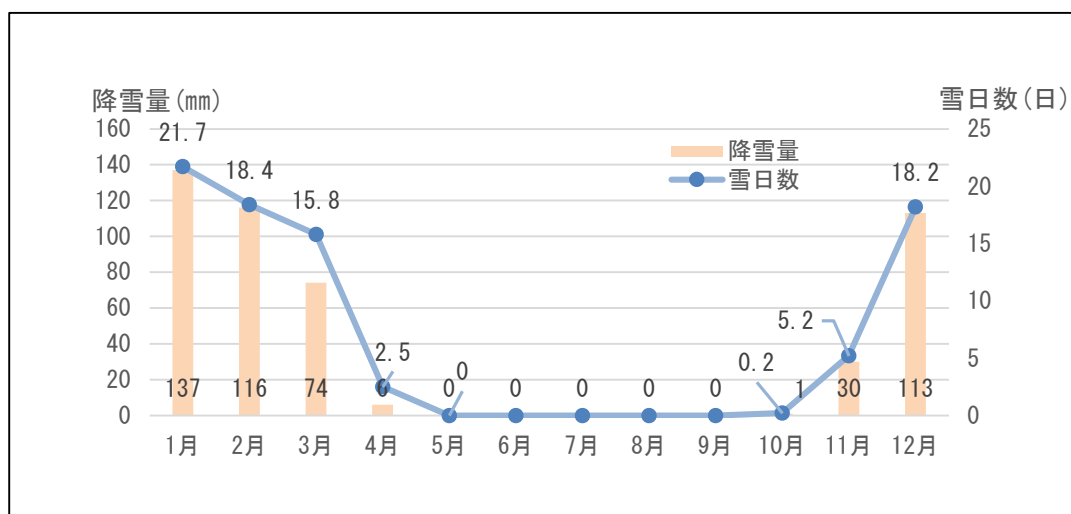
札幌市の気候は日本海型で、夏はさわやかで過ごしやすく、冬は雪が多く寒冷で、北半球の中緯度に位置することから夏と冬の日照量の較差が大きく、四季の変化がはっきりしています。4月下旬から6月は晴天が多く、花が次々と開花する様子が見られます。6月下旬から8月は平均気温が20℃を超える盛夏となりますが、湿度が低いいため、朝晩は比較的過ごしやすい傾向にあります。秋の訪れは早く、9月下旬には山間部で木々が色づき始め、10月中旬には紅葉が盛期を迎えます。また、10月下旬には早くも初雪が見られることがあります。根雪を観測するのは例年12月で、年間を通しての積雪量はおよそ5mに達します。1月の平均気温は-3.2℃で、平均「雪日数¹⁵」は年に82日※、年の3分の1が冬日（最低気温が氷点下）です。3月に入ると寒気が緩み、4月の上旬には根雪がなくなって長い冬が終わります。札幌の年平均気温は9.2℃、年平均降水量は1,146.1mm※です。

※いずれも1991年から2020年の平均値



札幌の気温と降水量の年間推移(1991年～2020年)

出典: 気象庁 HP



札幌の降雪量と雪日数(1991年～2020年)

出典: 気象庁 HP

¹⁵ 雪日数: 雪(みぞれも含む)が1cm以上降った日数

(3) 地形・地質、植生

札幌市の地形は、南西部に広がる山地、南東部の丘陵地・台地、豊平川がつくった中央部の扇状地¹⁶と北部の低湿地などから成り立っています。地質の基盤は、薄別層¹⁷という中生代の海成層¹⁸です。

■地形・地質

【南西部 山地】

札幌の市街地を囲むように、南西部には藻岩山、円山、三角山、手稲山など標高およそ 200～1,000mの山々が連なっています。豊平峡、定山溪域の山地は、新生代新第三紀¹⁹（およそ 1600～1100 万年前）にユーラシアプレート（アムールプレート）の下に太平洋プレートが沈み込むことによって生成された火成岩²⁰（主にデイサイト²¹）で、およそ 1200 万年～600 万年前に海底で堆積した地層が一部露出しています。

藻岩山や円山などの札幌を取り囲む山々は、およそ 600 万年前以降の火山活動によって形成され、およそ 200 万年前に活動を休止している火山です。

【南東部 丘陵地・台地】

およそ 250 万年前以降、石狩低地帯ではプレート衝突による東西圧縮の場となり、褶曲²²によって野幌丘陵や月寒丘陵などの起伏が形成されました。

およそ 4 万年前、支笏カルデラ形成の起因となった「支笏火山」の大規模な噴火によって、火砕流が発生し、大量の火山灰と軽石が石狩低地帯を覆い、丘陵の麓を埋めるように厚く堆積しました。この火砕流による堆積物が堆積による圧力と高温によって強く溶結したものが、南区石山などに見られる支笏溶結凝灰岩²³（札幌軟石）です。

札幌を広く覆った火山灰は、現在の月寒付近に台地として残されました。その台地の上には望月寒川、月寒川、厚別川、野津幌川などが上述の丘陵の向斜軸²⁴に沿ってほぼ南北方向に流れ、下刻²⁵したことから、東西方向に横切ると起伏を繰り返す地形を生み出しました。

【北部 低湿地】

札幌北部の大部分は、石狩川下流域、石狩平野の南西端域にあたり、新生代第四

¹⁶ 扇状地：川が山地から平地へ流れ出る際、土・砂・小石などが堆積して生じた扇状の地形

¹⁷ 薄別層（うすべつそう）：渡島帯西部地域に分布する札幌でもっとも古い地層

¹⁸ 海成層：堆積物が海底に堆積してできた地層

¹⁹ 新生代新第三紀：地質時代の区分の一つ。新生代を三分したときの中間の紀（およそ 2303 万年前～258 万年前までの期間）

²⁰ 火成岩：溶けたマグマが冷え固まってできる岩石

²¹ デイサイト：火山岩の一種。淡色で長石・石英などの無色鉱物が8割以上の体積を占める。珪長質な組成

²² 褶曲（しゅうきよく）：地層が波のように湾曲している状態。水平な地層に地殻変動による横圧力が加わるなどして生ずる。

²³ 溶結凝灰岩：凝灰岩が溶結した岩石。高温の火山灰が大量に堆積し、その重さと高温のために圧縮されて、粒子の一部が溶けてくっつき合い、溶岩状になった岩石

²⁴ 向斜軸（こうしゃじく）：褶曲した地層の谷底部分を結んだ線

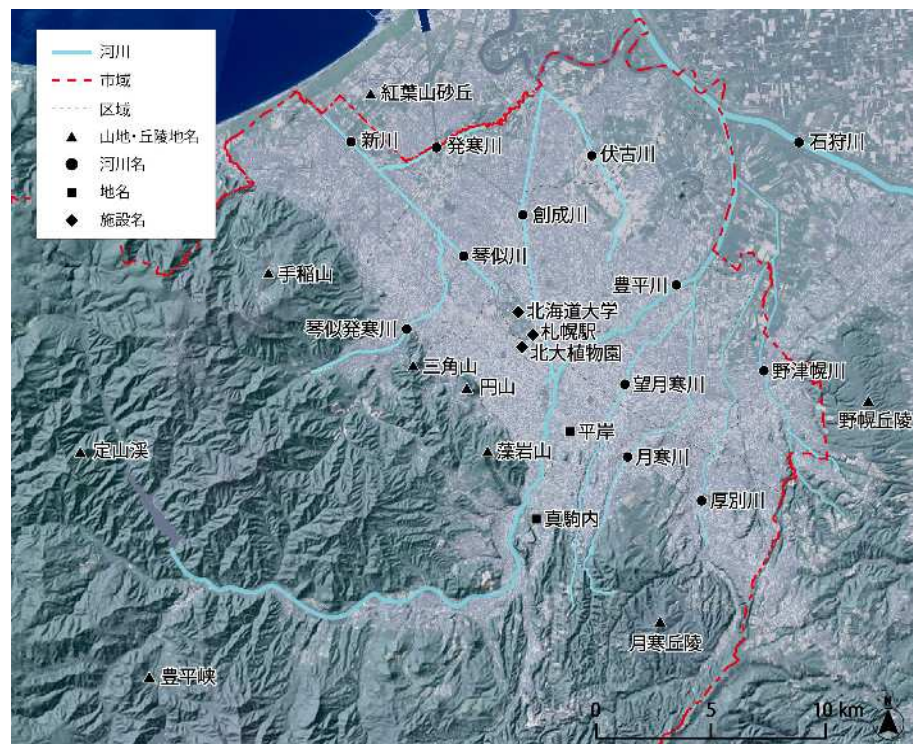
²⁵ 下刻（かこく）：河流が川底を低下させる働き。下方浸食

紀²⁶以降、氷河期において数回繰り返された氷期²⁷の海退²⁸と間氷期²⁹の海進³⁰、及び河川の堆積物によって形成された沖積平野³¹にあります。今からおよそ 6500～6000 年前をピークとする温暖期は「縄文海進」と呼ばれ、海岸線が現在よりおよそ 5km 内陸に入り込み、古石狩湾を形成していました。海退と海進によって紅葉山砂丘が形成され、その後の海水面の低下や石狩川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって低湿地の淡水化が進むと、湿生植物が繁茂して泥炭層³²を形成しました。

【中央部 扇状地】

札幌中央部は、南西部山地と南東部丘陵地・台地の間を北部低湿地へと流れる豊平川が作った扇状地です。豊平川は、およそ 4 万年前以降に真駒内・平岸方面に流れて旧豊平川扇状地（平岸面）を形成し、氷期の明けたおよそ 1 万年前以降に流路を変えて現在の豊平川扇状地（札幌面）をつくったと考えられています。

豊平川扇状地の扇頂³³は真駒内付近の標高およそ 100m、扇端³⁴部の北海道大学、札幌駅付近は標高 15～18m です。扇端部では、かつて地上に湧き出た伏流水が池や流れを作っていましたが、その名残は、現在も北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下「北大植物園」という。）などで見ることができます。



地形図

出典：国土地理院地図 陰影起伏図及び航空写真を基に加工

²⁶ 新生代第四紀：地質時代のうち最も新しい、人類が現れて以降現代を含む時代（およそ 258 万年前から現在までの期間）。氷期と間氷期を繰り返していた。

²⁷ 氷期：氷河時代のなかで、温帯地方まで氷河に覆われた特に寒冷な時期

²⁸ 海退：海面の下降、あるいは陸地の隆起によって海岸線が海側に移動し、陸地が広がること

²⁹ 間氷期：氷河時代における温暖な時期

³⁰ 海進：海面の上昇、あるいは陸地の沈降によって海岸線が陸側に移動し、海が陸に入り込んでくること

³¹ 沖積平野：河川の堆積作用でつくられ、現在までその作用が続いているような新しい平野

³² 泥炭層：主に泥炭から成る層のこと。泥炭は湖沼や河川の周辺、湿地など水はけが悪い土地に生育する植物の遺体が、水に浸ったままの環境下で未分解のまま堆積したもの。寒冷地で発達しやすい。

³³ 扇頂：扇状地の最上流部分。山地からの出口にあたる部分

³⁴ 扇端：地表で見られる扇状地の末端にあたる部分

■植生

現在、人口が集中する札幌市都心部の豊平川扇状地は、平野で比較的水はけがよいことから、かつては、カシワやミズナラが多く生えていました。また、湧水等が豊富だった現在の札幌駅周辺には、ヤチダモやハルニレなどの湿生林が、扇状地の北から東の泥炭地には、湿原植生³⁵が広がっていました。

札幌周辺の地形・地質は多様で変化に富み、気候は冷温帯³⁶と亜寒帯³⁷との移行帯³⁸で、温帯系と北方系の植物の分布域が重なるため、道内でも植物の種類数が豊富です。札幌を含む石狩低地帯が植物分布の境界となる例として、温帯系のクリやコナラの北限地域³⁹に当たることが知られています。植生帯としては、北海道を特徴づける針広混交林帯が山麓部で見られ、広葉樹と針葉樹がモザイク状に混生した森林となっています。

現在の札幌市は人口およそ197万人を抱える大都市ですが、森林面積は総面積のおよそ64%を占め、天然林が多いことなどから、市街地を取り巻く自然環境に恵まれています。

一方、札幌の植生の変遷には、明治時代以降のまちの歴史と、市民の自然への接し方が大きく関わっています。天然記念物である藻岩山と円山は、かつて伐採された歴史がありましたが、その後の有識者や市民の活動で保全されてきました。また、中心部にある北大植物園内には開拓以前からの植生と地形が残された自然林がありますが、近年は都市化による地下水位の低下が一因と推測される植生の変化も見られます。湿原は1970年代までに人為的に排水されて農地となり、その後の宅地化でほとんどが消失しました。現在は北区及び東区にわずかに湿原植生が残り、絶滅危惧種⁴⁰を含む湿原特有の生物の貴重な生息環境となっています。

トピック

太古の札幌の自然

現在の札幌周辺は、2300 万年前以降、プレート運動や火山活動などにより、海と陸の環境を何度も繰り返しました。札幌で見つかる生物の化石の多くは、新第三紀中新世にあたるおよそ 1200 万年～600 万年前の、かつて札幌が海だった時代に生息していた生物のものです。

■サッポロカイギュウ

平成 15 年（2003 年）に豊平川で化石が発見された、世界最古の大型カイギュウです。札幌市博物館活動センターで復元骨格標本が展示されています。

■クジラ化石

平成 20 年（2008 年）に小金湯地区（札幌市南区）豊平川河床で、およそ 900 万年前と考えられる鯨類（セミクジラ科）等の化石が発見され、札幌市博物館活動センターで現在も調査が行われています。



サッポロカイギュウ復元骨格標本
出典：札幌市博物館活動センター

³⁵ 湿原植生：過湿かつ低温であるために、有機物の分解が進まず堆積して泥炭となった場所に成立する植生

³⁶ 冷温帯：温帯のなかで、冷帯に近い地帯

³⁷ 亜寒帯：温帯と寒帯の間にある地帯。冷帯

³⁸ 移行帯：二つの異なる動植物区系、または植物群落などの間にある地帯。両者の構成種が混在する。

³⁹ 北限地域：北の限界

⁴⁰ 絶滅危惧種：個体数の急減もしくは生息地の喪失などにより、絶滅の危機に瀕している動植物等の種

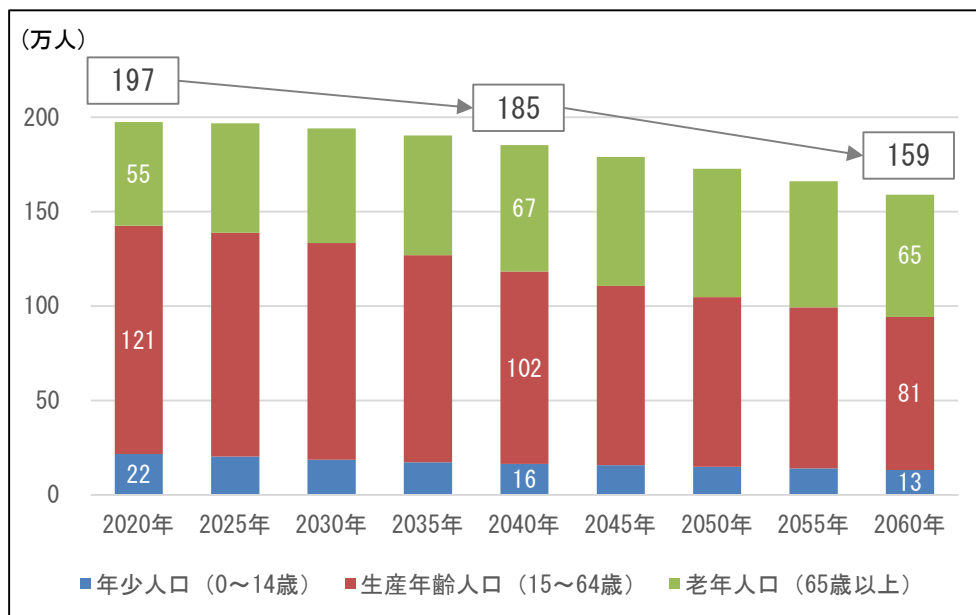
2 社会的環境

(1) 人口

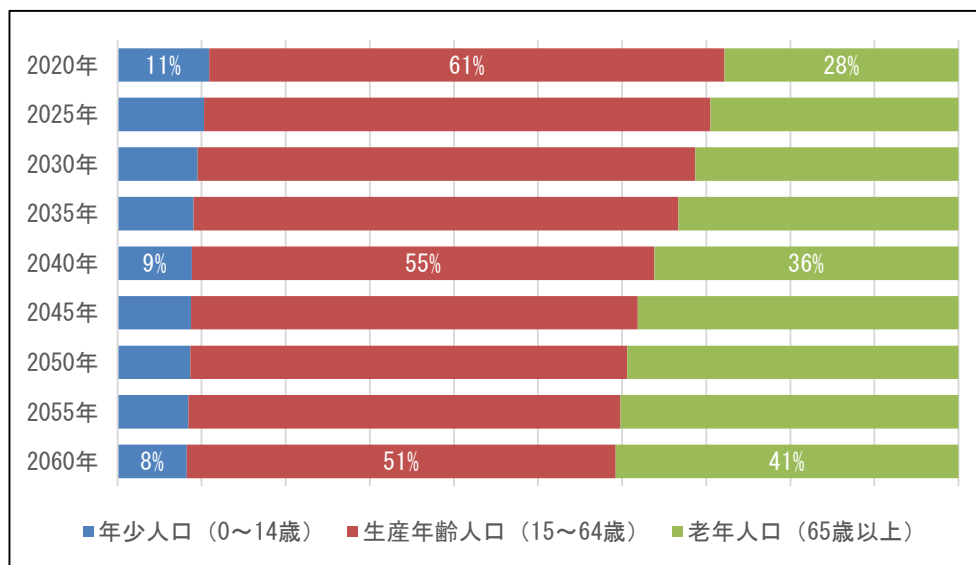
札幌市の人口は1,965,277人、世帯数は1,004,177世帯で、市町村の人口規模では全国で4番目です（令和7年3月現在）。

北海道の人口が平成9年（1997年）をピークに減少する中、札幌市の人口は令和2年（2020年）の1,973,395人をピークとして減少に転じ、令和22年（2040年）には、およそ185万人、令和42年（2060年）にはおよそ159万になると見込まれています。

総人口に占める年齢層別の人口割合では、14歳以下人口が今後およそ40年間は横ばいで推移すると予測される一方、65歳以上の高齢者が占める割合は、令和22年（2040年）には36%、令和42年（2060年）には41%と予想され、少子高齢化が進行します。



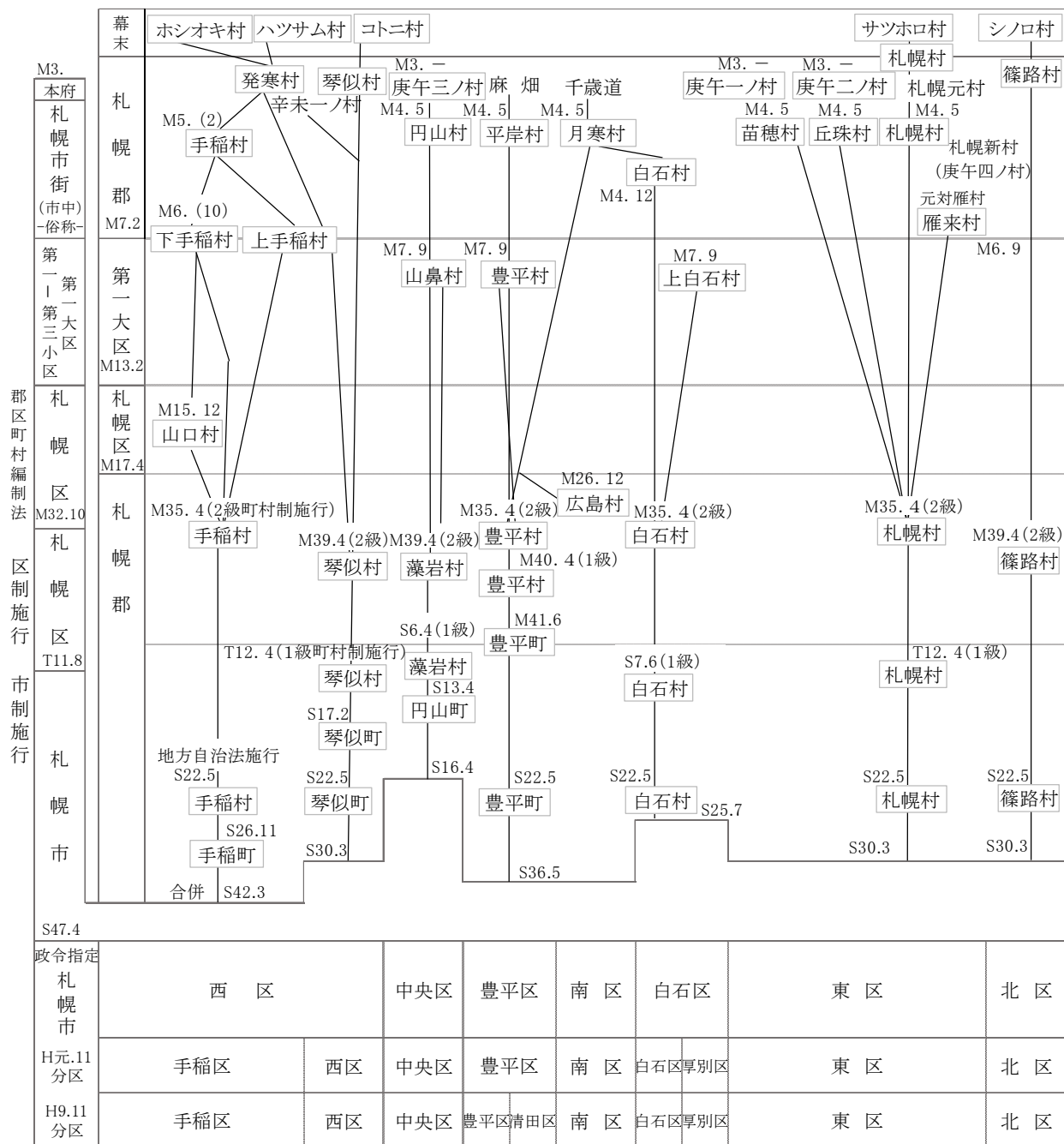
札幌市の人口の将来見通し（各年10月1日現在）
資料：総務省「国勢調査」、札幌市「札幌市の将来推計人口（令和4年推計）」



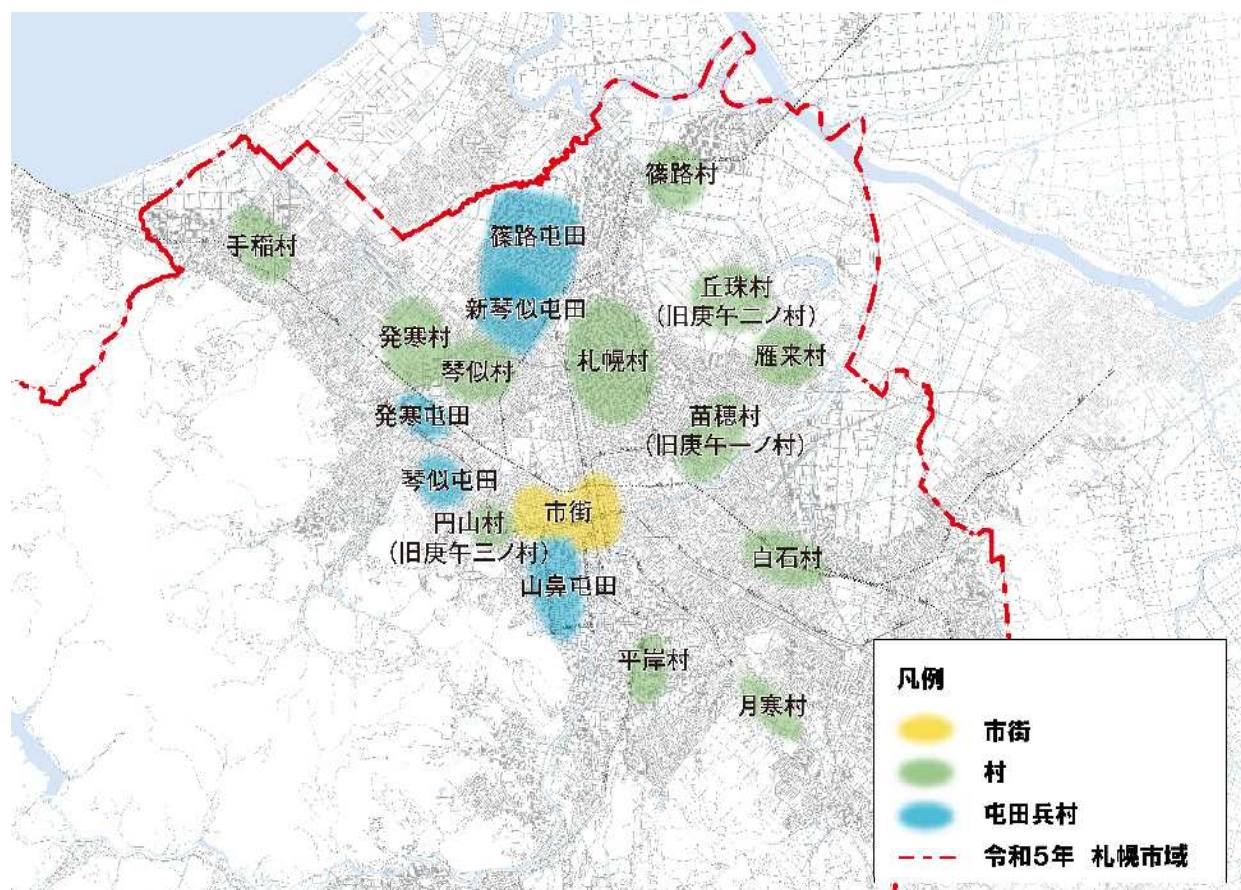
総人口に占める年齢層別の人口割合（各年10月1日現在）
資料：総務省「国勢調査」、札幌市「札幌市の将来推計人口（令和4年推計）」

(2) 市域の変遷

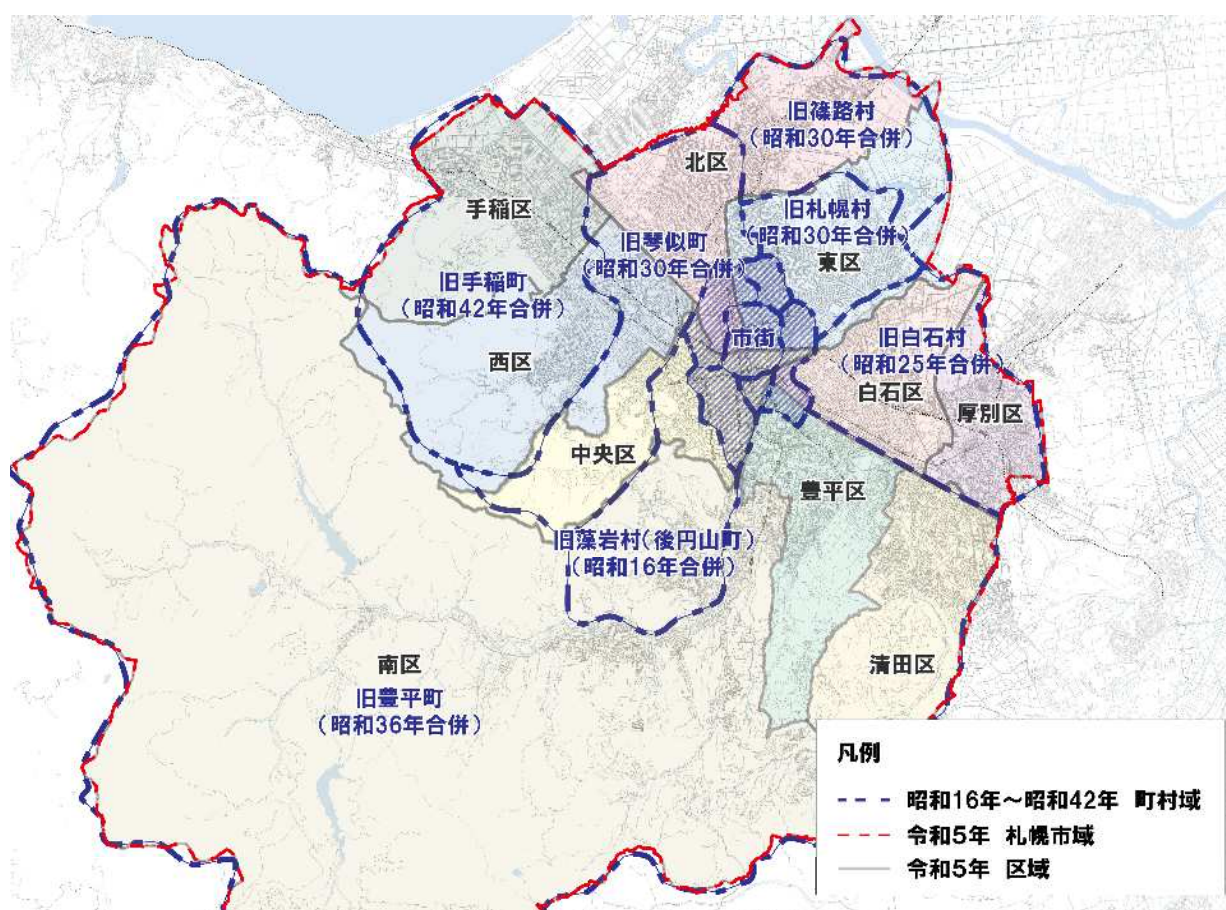
現在の札幌市域は、開拓使⁴¹の本府建設によって早期に市街地として発展を遂げた都心部と、幕末以降、国の移民政策等によって形成された周辺村落等の中で、合併や境界の変更を繰り返して形成されました。現在の行政区の区域とかつての村落等の区域は必ずしも一致しませんが、市域の変遷についてはおおむね下図のとおりです。



⁴¹ **開拓使**：北海道の開拓経営のためにおかれた官庁。明治2(1869)年に設置され、明治15年(1882年)に廃止と、短期間ではあったが北海道近代化の基礎を固めるうえで大きな役割を果たした。



明治 3～6 年頃の札幌郡 札幌市街と屯田兵村及び周辺村



周辺町村合併の変遷及び現在の区域

(3) 交通

ア 道路交通

札幌市の道路交通は、市街地中心部に格子状の街路網が整備され、それを囲む環状道路と、環状道路から東西南北に向かう放射状の道路が配置されることで骨格が形成されています。また、自動車専用道路として、白石区の札幌ジャンクションを起点に、旭川方面と千歳・苫小牧・函館方面へ延びる道央自動車道と、小樽方面へ延びる札幌自動車道が通じています。

イ 公共交通機関

札幌市内の公共交通機関には、市営地下鉄、路面電車（市電）、北海道旅客鉄道株式会社（JR 北海道）が運航する鉄道及び民間 5 社による路線バスがあります。また、東区には札幌市と道内外 12 都市とを空路で結ぶ札幌丘珠空港を有します。

市営地下鉄は、麻生駅（北区）と真駒内駅（南区）を結ぶ全長 14.3 km の南北線、宮の沢駅（西区）と新さっぽろ駅（厚別区）を結ぶ全長 20.1 km の東西線、栄町駅（東区）と福住駅（豊平区）を結ぶ全長 13.6 km の東豊線の 3 路線で、積雪のある札幌で雪の影響を受けない重要な移動手段です。また、世界的にも珍しいゴムタイヤ式の車両を採用していることも特徴です。

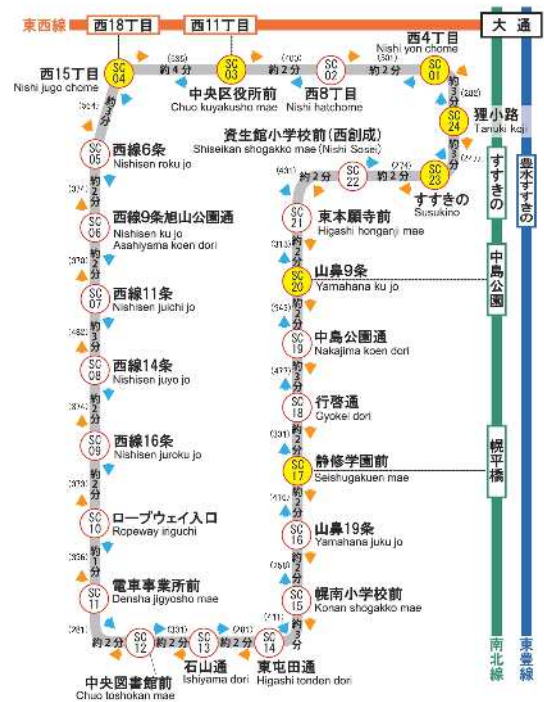


地下鉄路線図
出典：札幌市交通局HP

路面電車（市電）は、かつて北は新琴似駅前、南は豊平駅前（豊平区豊平5条9丁目辺り）まで路線を拡大したことがありましたが、現在は中央区に1系統のみ延長8.9kmの区間で環状運転を行っています。



最盛期の市電路線図
出典:『さっぽろ文庫 22 市電物語』札幌市教育委員会編

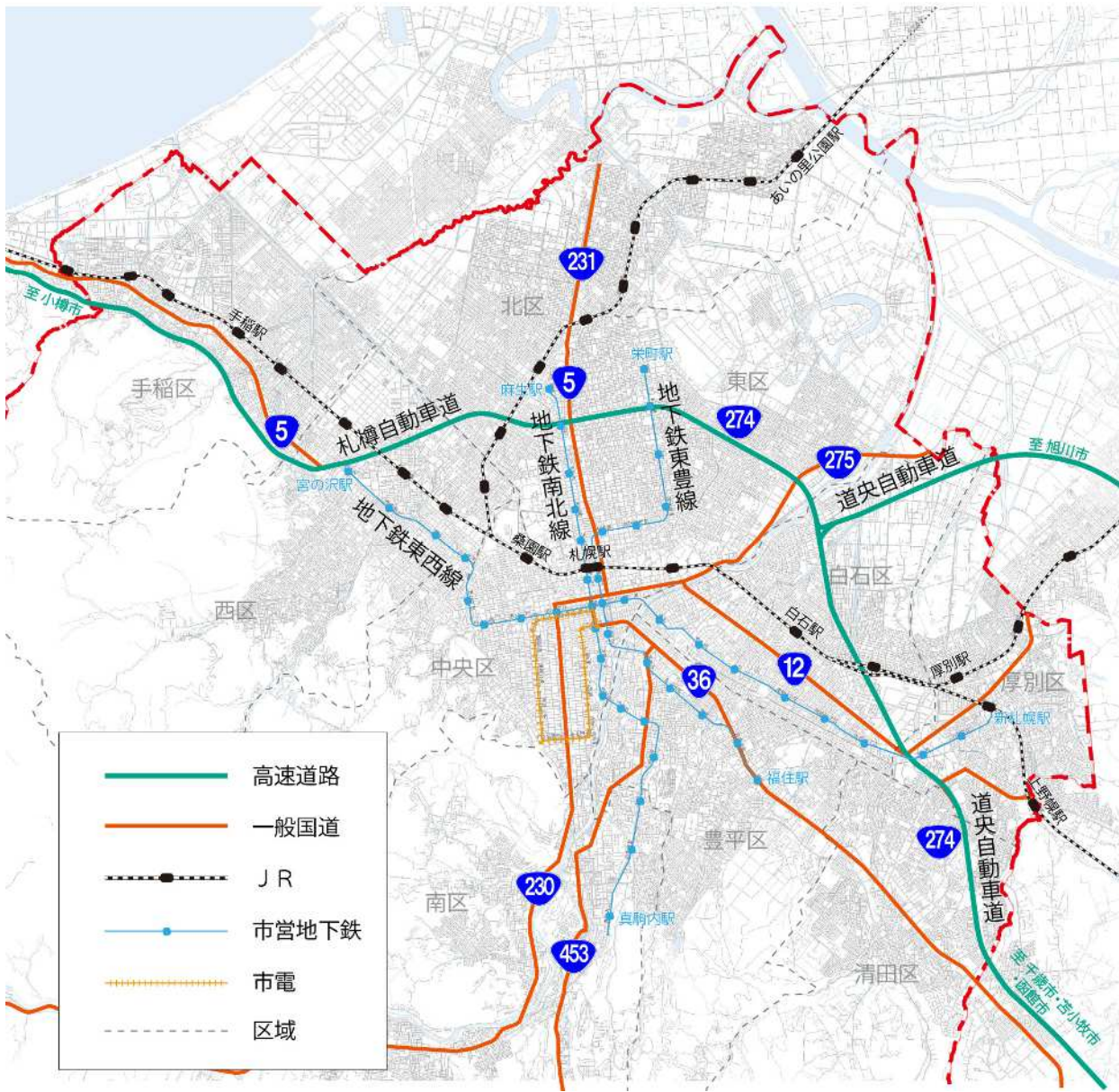


○は外回り、△は内回りを示します。()内の数字は停留場間の距離(単位:m)です。
●は地下鉄との乗継指定停留場です。
※ 西4丁目・西01丁目・西02丁目の乗継指定は、地下鉄大環線・東豊線との乗継指定が不明なためです。

現在の市電路線図
出典:札幌市交通局 HP

鉄道は、JR 札幌駅を中心に小樽・手稲方面と厚別・江別（旭川）方面を結ぶ函館本線、函館本線から分かれ、白石駅を起点に厚別区上野幌・千歳方面へ延びる千歳線、桑園駅を起点に北区あいの里・石狩当別方面へ延びる札沼線（学園都市線）があります。また、今後北海道新幹線（新函館北斗・札幌間）の延伸が予定されています。

路線バスは、都心のバスターミナルに加え、終点付近や主要な中継点となる地下鉄駅等の乗継用バスターミナルを発着点として市内広範囲をカバーします。



(4) 関連施設一覧

札幌市が土地や建物を所有する文化財に関連する施設として、下表の施設があります（その他の公的機関による文化財に関連する施設については、第5章の79ページに記載しています。）。

No	名称	所在	施設の概要
1	札幌市公文書館	中央区南8条西2丁目5-2	平成25年(2013年)7月に開館。特定重要公文書の整理・保存・閲覧
2	札幌市埋蔵文化財センター	中央区南22条西13丁目1-1	平成3年(1991年)3月に開館。埋蔵文化財の保存に関する相談や遺跡の発掘調査、出土した遺物・記録などの整理・研究、収蔵・展示
3	札幌オリンピックミュージアム	中央区宮の森1274番地 (大倉山ジャンプ競技場内)	札幌オリンピックの資料の展示や様々なウィンタースポーツを疑似体験する装置を設置
4	新琴似屯田兵中隊本部	北区新琴似8条3丁目1-8	屯田兵中隊の本部として建てられたもの。資料館として、当時の屯田兵村のジオラマや、中隊長の服など、屯田兵にまつわる資料の展示
5	屯田郷土資料館	北区屯田5条6丁目 (屯田地区センター内)	屯田兵による開拓100年の歴史を記念して、昭和63年(1988年)10月に開設。実物大の屯田兵の家屋を再現
6	篠路烈々布郷土資料館	北区百合が原11丁目	開拓100年目の昭和57年(1982年)に開館。文献や古文書他、伝統芸能の資料の展示
7	札幌村郷土記念館	東区北13条東16丁目2-6	大友亀太郎の役宅跡地。亀太郎関連文書、玉ねぎ関係の資料等の展示
8	丘珠縄文遺跡	東区丘珠町584他 (サッポロさとらんど内)	平成30年(2018年)7月に体験学習館と展示室が開館。火おこしや土器づくりなどの縄文体験の提供。丘珠縄文遺跡の出土品や解説パネルなどの展示
9	白石郷土館	白石区南郷通1丁目南8-1(白石区複合庁舎1階)	平成28年(2016年)11月に開館。旧仙台藩白石城主片倉小十郎の家臣が移住した明治4年(1871年)から、白石村が札幌市と合併した昭和25年(1950年)までの記録を、パネルなどで展示
10	つきさっぷ郷土資料館	豊平区月寒東2条2丁目3-9	旧陸軍北部軍司令官官邸として昭和16年(1941年)に建てられた建物に、昭和60年(1985年)に開館。旧陸軍資料の展示
11	平岸郷土史料館	豊平区平岸3条9丁目	平岸地区の開拓110年目にあたる昭和57年(1982年)に開館。土器や石器、農機具などの展示
12	札幌市博物館活動センター	豊平区平岸5条15丁目1-6	札幌の特徴ある自然環境とその成り立ちについて解説するパネルや標本、資料などの展示
13	福住開拓記念館	豊平区福住1条4丁目 (福住まちづくりセンター併設)	昭和46年(1971年)に開館、平成9年(1997年)に福住まちづくりセンターに併設。開拓当時の生活の様子を描いた版画の他、昔の馬車、農機具などの展示
14	あしりべつ郷土館	清田区清田1条2丁目 (清田区民センター内)	昭和58年(1983年)に開館。平成14年(2002年)1月に清田区民センターに併設。考古資料や歴史資料、農機具などの展示
15	サッポロピリカコタン(アイヌ文化交流センター)	南区小金湯27番地	アイヌ民族の伝統衣服や民具などの展示
16	定山溪郷土博物館	南区定山溪温泉西1丁目31番地 (定山溪学園敷地内)	定山溪の歴史資料の展示、定山溪の歴史の音声解説付き「クロニクル展示」など。
17	札幌市交通資料館	南区真駒内東町1丁目	市営交通の歴史写真、車両や部品、乗車券などの展示
18	簾舞郷土資料館	南区簾舞1条2丁目4-15 旧黒岩家住宅(旧簾舞通行屋内)	昭和61年(1986年)に旧簾舞通行屋内に開館。当時の開拓農家の様子の展示など
19	琴似屯田歴史館資料室	西区琴似2条7丁目	屯田兵に関する資料や屯田兵が実際に使っていた道具の展示
20	手稲記念館	西区西町南21丁目3-10	手稲町と札幌市の合併を記念して昭和44年(1969年)に開館。手稲の郷土の歴史解説コーナー、歴史資料の展示

札幌の歴史的環境について、札幌の文化財や歴史文化の成立に深く関わりと考えると考えられる出来事を中心に、必要に応じて他の地域の歴史にも触れながら記載します。

(1) 旧石器文化

現在、日本列島に現生人類が住み始めたのは、今から4万年前頃と考えられています。北海道で最も古い人類の足跡は、今のところ3万年前くらいまで遡りそうです。当時は、いわゆる最終氷期で年平均気温は現在よりも7～10℃ほど低く、海面は100m以上も低かったといわれています。このとき北海道とユーラシア大陸との間の海峡は陸地化しており、旧石器文化の人々は、この陸橋を渡って北海道の地にやってきました。この頃の人々は、大型哺乳動物などの獲物を求めて、移動を繰り返す生活を送っていたと考えられています。

札幌市内でも旧石器文化の石器が見つっていますが、その石器の形から、市内で最初に人類の足跡を残したのは、1万数千年前頃の人々と考えられます。

(2) 縄文文化

長い氷河期が終わるとともに、旧石器文化は終わり、縄文文化がはじまりました。1万1500年前頃から温暖化が進むと、気候が徐々に安定していきました。安定的で温暖な気候が長く続いたことは、縄文文化が持続した大きな要因の一つで、当時の人々は、森林や湖沼、海辺などの豊かな自然の恵みを上手に利用することで、同じ場所に長く住み続けられるようになりました。



竖穴住居跡（縄文晩期）の発掘風景

北海道内では、帯広市の遺跡から1万4000年前頃（縄文草創期）の土器と石器が発見されていますが、札幌市内で縄文草創期の遺跡は見つかっていません。市内で最も古い土器は、主に南東部の丘陵地や台地などにある遺跡から見つかったもので、今からおよそ8000年前の縄文早期のものです。この頃から、縄文海進に伴って現在の札幌市域にも海水が浸入し、北部には内湾が形成されます。その後、川が運んできた土砂で北西部には砂州が形成され、内湾は徐々に埋め立てられました。札幌の縄文遺跡は、生活に適さなかった北部低地を取り囲むように、台地・丘陵部のほか、扇状地から海岸砂丘まで、広く分布しています。

(3) 続縄文文化

温暖な気候は、縄文前期（6500～6000 年前頃）をピークに徐々に寒冷化し、縄文文化の終わり頃（2500 年前頃）には、現在とほぼ同じくらいの気候・自然環境になりました。この頃、大陸から日本列島に農耕文化が波及して、弥生文化が生まれました。東北地方北部まで広がった弥生文化ですが、北海道では、稲作を主体とする弥生文化そのものは受け入れられませんでした。弥生文化の影響を受けながらも、縄文文化の要素を引き継ぐ、続縄文文化へと移り変わっていったのです。この頃の遺跡からは、東北地方北部で作られた土器や弥生文化に特有の管玉（くだたま）などが発見されます。一方で、北海道の続縄文文化の遺跡から発見されることの多いコハク製の玉が東北地方北部の遺跡から発見されることもあり、道央部以南と東北北部との交流が盛んだったことが分かっています。

札幌市内の遺跡でも、東北地方北部で作られた土器や管玉などが見つかり、北方の文化との交流を示す土器や石器なども見つかりました。また、遺跡の所在する環境も変わりました。南東部の丘陵地や台地の上にあった生活圏が、北部の低湿地の乾燥化が進むことで徐々に北へ広がりました。遺跡に遺された焚き火跡からは、シカやヒグマなどの動物骨や、サケ、ウグイ、イトヨ、チョウザメなどの回遊性・淡水性の魚類のほか、ニシンやフサカサゴといった海水性魚類の骨も見つかり、河川や海辺での漁も盛んに行われていました。

(4) 擦文文化

擦文（さつもん）文化は、ほぼ本州の奈良・平安時代に相当し、7 世紀後半に、本州の強い影響を受けて成立します。本州の土師器をまねた擦文土器が使われるようになり、それまで、1 万年以上使われ続けた縄文が、土器の表面から姿を消しました。

「擦文」という名称は、当時作られた土器の表面に、へら状の木片などによると考えられる擦り痕が付いていることに由来します。

擦文文化は、本州の生活様式を受け入れながら独自の文化を育み、南から北、東へと分布を広げ、9～10 世紀には、既に北海道のオホーツク海沿岸に広がっていた北方系のオホーツク文化とも融合しながら、10 世紀には北海道全域に、さらに東北北部やサハリン南部、千島列島南部まで広がりました。

札幌市内でも、8 世紀から 13 世紀に属する擦文文化の遺跡が見つかっています。当時の集落は、河川のそばに営まれ、狩猟、漁労⁴²、採集のほか、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀農耕も行われていました。特に、かつて湧き水のあった北海道庁、北大植物園、北海道知事公館のあたりを源に流れ出した幾筋もの河川が北海道大学の北側で集まり、篠路方面に北流していた旧琴似川流域には、数多くの遺跡が集中して見つかっています。



擦文土器

⁴² 漁労：魚介類や海藻など水産物をとること

(5) アイヌ文化期以降

本州で平安時代が終わり鎌倉時代になる頃、北海道では、土器や竪穴住居⁴³が作られなくなり、擦文文化が終わりました。土器は、鉄鍋や木製の漆器に、竪穴住居は平地住居⁴⁴に変わりました。これ以降、本州の中世から近世に相当する時期を、北海道の考古学上の時代区分としてアイヌ文化期と呼びます。ここでいう「アイヌ文化」とは主に近世に松前藩や本州の役人・旅行家によって記録されたアイヌ民族の文化を指し、それはこの時期を通して形成されていったものと考えられています^{※1}。

札幌市内でもアイヌ文化期の遺跡はいくつか見つかり、事例としては少ないものの、遺構では、中央に炉跡を伴う平地住居や平面が長楕円形で副葬品を伴う土坑墓、遺物では、主に鍋や刀、刀子といった金属製品のほか、漆器や陶磁器などが見つかっています^{※2}。

※1) 参考文献：長沼孝・越田賢一郎2011「時代の概観」「Ⅰ 考古学から見た北海道」『新版北海道の歴史 上』北海道新聞社

※2) 市内のK528遺跡からは、中央に二つの炉をもつ擦文文化期の平地住居が見つかり、アイヌ文化期への「移行期の様相を示すもの」と考えられています^{※3}。また、「アイヌ文化にみられる子熊飼育型のクマ送り、海獣狩猟などの習慣、耳飾りなどの装身具の着用など、オホーツク文化の影響なしに考えられないことが（中略）指摘されてきました^{※4}。このように、「アイヌ文化」を考える際には、擦文文化やオホーツク海沿岸を中心に広がったオホーツク文化からの継続性も重要と考えられています。

※3) 引用文献：長沼孝・越田賢一郎2011「二、竪穴住居から平地住居へ」「第5節 擦文文化からアイヌ文化へ」『新版北海道の歴史 上』北海道新聞社

※4) 引用文献：長沼孝・越田賢一郎2011「八、オホーツク人の系譜をめぐって」「第3節 北方文化の展開」『新版北海道の歴史 上』北海道新聞社

■石狩周辺への和人⁴⁵の流入

札幌を含む石狩川下流域は、鮭等の資源が豊富で、かつてアイヌ民族の集落が多く所在しました。1700年代後半には、豊平川流域などに松前藩がアイヌ民族と交易するための商場（後のイシカリ十三場所の一部）が成立し、相互の交易が盛んになりました。

アイヌ民族は、古くから狩猟・採集と補助的な農耕等に加え、交易を生業としていましたが、松前藩が幕府の許可を得て蝦夷地での交易を独占するようになると、次第に交易の条件等がアイヌ民族に不利なものに変わりました。イシカリ十三場所の成立期には、藩が商場の経営権を商人に委ねる場所請負制⁴⁶が一般化し、場所請負人である商人が直接漁業経営に乗り出すと、アイヌ民族は、和人商人らの取引相手から、漁場労働者へと立場を変えざるを得なくなりました。

■石狩役所の設置

元文4年（1739年）のいわゆる元文の黒船⁴⁷来航により、ロシア帝国の脅威を認識した幕府は、蝦夷地の領有を対外的に宣言し、国防を強化するため、寛政11年（1799年）に東蝦夷地を、文化4年（1807年）には札幌を含む西蝦夷地を相次いで直轄化し

⁴³ 竪穴住居：地面を掘りくぼめ、その上方に屋根をかけた半地下式の住居形式。縄文・弥生・古墳時代に広く行われた。

⁴⁴ 平地住居：竪穴を掘らず、地表を床面として構築された住居形式

⁴⁵ 和人：明治以前においては、本州から渡来してきた人々をいい、現在は日本のなかで一番人数の多い人々を、アイヌの人たちと並べて呼ぶときの呼び名

⁴⁶ 場所請負制：松前藩の藩主や藩士が、運上金を納めさせる代わりに蝦夷地における交易の権利を商人に委託し、交易を行う場所の経営を請け負わせた制度

⁴⁷ 元文の黒船：鎖国期であった元文4年（1739年）、牡鹿半島、房総半島、伊豆下田などに、ロシア帝国より来航した探検船。元文の黒船来航事件

ました。文政4年（1821年）に一度松前藩に復領⁴⁸しましたが、安政2年（1855年）には蝦夷地全域を再び直轄化します。

幕府は前年、箱館奉行を置くとともに、東西蝦夷地交通の要衝であった石狩地方を国防と開拓の重要拠点と定め、石狩役所を設置し、札幌周辺の開拓を進めました。

■幕府の移民政策による諸村の開拓

幕末には、幕府が移民政策をとり、幕臣らが農地を開きました。安政4年（1857年）頃から、発寒、星置などで開墾が始まり、石狩役所の荒井金助が設けた荒井村は、後に篠路村となりました。安政5年（1858年）頃には、早山清太郎が札幌で初めて稲作を成功させ、その後篠路村に本拠を移しました。

慶応2年（1866年）、二宮尊徳門下で報徳仕法（農村復興政策）を学び、渡島国で開拓の実績があった大友亀太郎が、幕府の命を受けて御手作場⁴⁹を設け、大友がこのとき開削した「大友堀」は、後に創成川の一部となりました。



大友亀太郎像
札幌市公文書館所蔵

札幌のアイヌ民族の歴史

これまで札幌の歴史は、その多くが幕末から明治時代以降に各地から移住した人々の「開拓の歴史」として語られ、アイヌ民族の姿が登場するのは、近世以前に限られることも少なくありませんでした。札幌のアイヌ民族を知る手掛かりとなる文献や史料の不足がその一因ですが、昭和30年代までは、アイヌ民族の動態について、公的な調査がされてこなかったことが、こうした事態を招いたとの指摘もあります。

実際には、アイヌ民族は、明治以降も札幌開拓の様々な場面で働き手として貢献するなど、国の土地政策・同化政策の影響を受けながらも、今日まで札幌の生活者であり続けています。また、20世紀に、北海道の政治・経済の中心都市となった札幌は、アイヌ民族にとって様々な活動の場になりました。

大正時代には、キリスト教伝道師ジョン・パチェラーが中心となり、札幌の中等学校等に通うアイヌ民族の若者の寄宿舎となる「パチェラー学園」が開設されると、アイヌ民族の女性でパチェラーの養女となったパチェラー八重子らが寄稿した「ウタリグス」誌の反響などもあり、学園には多くのアイヌ民族が集いました。昭和に入り、アイヌ民族の伝統工芸に対する社会的関心が高まると、市内にアイヌ民族が営む工芸店が登場します。

昭和57年（1982年）には、開拓使による河川での鮭の採捕禁止により行われなくなっていた、新しい鮭を迎えるアイヌ民族の伝統儀式「アシリチェブノミ」が豊平川で復活し、また、平成6年（1994年）には、国の重要無形民俗文化財であるアイヌ古式舞踊（昭和59年（1984年）指定）の保護団体に札幌ウポポ保存会が指定されるなど、札幌では、アイヌ民族の伝統文化を継承する活動が続けられています。

⁴⁸ 復領：異国の脅威のため一時幕府の直轄領としていた蝦夷地を、再び松前藩の領地としたこと

⁴⁹ 御手作場：官の扶助・保護によって開墾した農場のこと

(6) 近現代（市制施行まで）

■開拓使の設置

明治2年（1869年）、明治政府は開拓使を設置し、北海道開拓の拠点として、札幌の都市建設が始まりました。中でも、黒田清隆が開拓を主導した明治4年（1871年）以降は、潤沢な予算に支えられ、アメリカ合衆国を主体とした多数の外国人技師の招へいと最先端技術の導入により、農業の近代化や産業の振興が計画的に進められました。



北海道庁本庁舎
北海道大学附属図書館所蔵

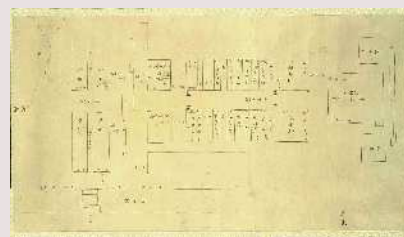
明治15年（1882年）には開拓使が廃止され、函館県・札幌県・根室県の三県と農商務省北海道事業管理局が設置された三県一局時代を経て、明治19年（1886年）からは北海道庁が設置され、札幌はその本庁所在地となりました。本州ほかの各地からの移住者により形成された町村と中心市街地を結ぶ交通網等の整備、湿地帯の排水による農地化が進んだことは、後年の人口増に対応した、周縁部を含めた急速な都市化を支える基盤となりました。一方で、先住民族であるアイヌ民族は、それまでのように土地を利用できなくなり、生活に深刻な影響を受けました。

トピック

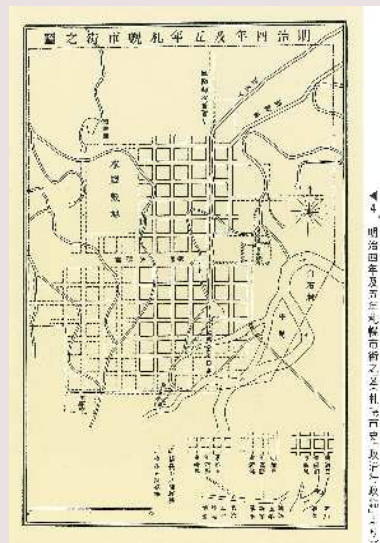
島義勇と岩村通俊

開拓使による札幌の都市建設は、旧佐賀藩士の開拓判官島義勇の構想から始まりました。明治2年（1869年）10月、この地に到着した島は、現在の円山にあたるコタンベツの丘から眼下に広がる大地を見下ろし、街づくりに思いを巡らせたと言われています。島の構想を記した「石狩国本府指図」には、現在の札幌の特徴につながる整然とした街区割りや、後の大通公園に相当する（官民街を分ける）空閑地も既に見られます。島は先住のアイヌ民族や幕末に移住していた和人の協力を得ながら市街地整備事業を進めましたが、着手から3か月余り経った明治3年（1870年）1月、志半ばで任を解かれます。

島の解任後にその構想を引き継ぎ、街づくりを進めたのは、後に北海道庁初代長官を務めることになる岩村通俊でした。島と岩村の時代を通して、札幌神社（後の北海道神宮）、日本最古の都市公園とされる偕楽園、札幌で最初の官立学校である資生館、後の歓楽街すすきのへ発展する遊郭などが次々と形成され、岩村の退任の直後に竣工した開拓使本庁舎やお雇い外国人宿舍などの洋風建築物は、当時の市街地の景観を様変わりさせるものでした。二人の開拓判官の働きにより動き出した札幌の本府建設は、後に黒田清隆らが進めた「開拓使10年計画」による北海道開拓の足掛かりとなりました。



石狩国本府指図
北海道大学附属図書館所蔵



明治4年及び5年札幌市街之図
出典：『さっぽろ文庫別冊・札幌歴史地図（明治編）』
札幌市教育委員会編

トピック

札幌の屯田兵

札幌には、屯田兵が発展の礎を築いた地域があります。明治8年（1875年）、当時の琴似・発寒両村にまたがる地域に最初の屯田兵村である琴似兵村が、続いて明治9年（1876年）には、中心市街地の南に接し藻岩山と豊平川に挟まれた地域に山鼻兵村が設けられました。また、後年は北部低地に、明治20～21年（1887～1888年）の新琴似、明治22年（1889年）の篠路の両兵村が設けられ、軍事訓練を行いながら農地の開墾、道路や用水路・排水溝等の基盤整備等の任にあたりました。

札幌の屯田兵は、前期（琴似・山鼻兵村）は主に宮城、福島、青森等の東北地方からの、後期（新琴似・篠路兵村）は主に佐賀、熊本、福岡、山口等の九州や西日本からの志願者を移住させたもので、言葉や習慣の異なる地方から集まった人々が、慣れない土地で様々な苦労を経験しながら地域の発展を支えました。明治10年（1877年）の西南戦争、明治28年（1895年）の日清戦争など有事の出兵はもちろん、平時の警備や災害時出動などの治安維持も屯田兵の職務でした。



琴似屯田兵屋
北海道大学附属図書館所蔵

■地方自治の時代へ

明治32年（1899年）、北海道区制⁵⁰の制定と同時に、本府に始まる中心市街地が地方自治体としての札幌区となり、明治43年（1910年）には、札幌区に周辺の豊平・白石・札幌・藻岩の各町村の一部区域が編入されました。

大正時代に入ると、第一次世界大戦による軍需が札幌の鉱工業の発展を後押ししました。大正7年（1918年）に札幌区・小樽区を会場として開催された「開道五十年記念北海道博覧会」は、1か月半の期間中に140万人を超える来場者を記録する、当時の地方博覧会としては大変大きなもので、札幌は北海道内外に広く紹介されました。

大正11年（1922年）には、市制が施行され、人口12万7千人の札幌市が誕生しました。

トピック

札幌農学校と遠友夜学校

北海道大学の前身である札幌農学校は、明治5年（1872年）、北海道開拓に従事する人材育成のため、東京に「開拓使仮学校」が開設されたことに始まります。明治8年（1875年）の札幌移転後に「札幌学校」となり、さらに翌年には「札幌農学校」へと改称されました。同校は、日本で初めて学士の学位を授与する仕組みを持った教育機関でもあります。

初代教頭としてマサチューセッツ農科大学の学長であったウィリアム・クラークが招かれ、8か月の在任期間中にその教えを受けた第一期生には、後の北海道帝国大学（札幌農学校の後身で、大正7年（1918年）に設置され、昭和22年（1947年）に北海道大学に改称）初代総長となる佐藤昌介ら、また、クラークの帰国後、ウィリアム・ホイラーが教頭に就任した後に入学した第二期生には、内村鑑三、宮部金吾らの名が見られ、北海道開拓のみならず近代日本の発展に貢献した多くの人材が同校から出ました。

また、札幌農学校と関係が深い札幌の歴史に残る特色ある学びの場として、「遠友夜学校」があります。遠友夜学校は、明治27年（1894年）、札幌農学校を卒業し同校の教授となっていた新渡戸稲造とその支持者が開いた私塾で、経済的な理由で就学できない青少年らの学ぶ意欲に応えるため、当時としては珍しく、男女の別なく無料で授業を行いました。その崇高な精神に共鳴し、無償で学務や教師の仕事を買って出た友人や札幌農学校生、温かな援助を惜しまなかった市民らにも支えられ、50年にわたり、年齢・性別にかかわらず多くの市民に学びの機会を提供し続けました。



遠友夜学校新校舎
出典：札幌遠友夜学校

⁵⁰ 北海道区制：市制に関連した大日本帝国憲法下における地方自治に関する勅令。札幌区・函館区・小樽区、旭川区、室蘭区、釧路区がそれぞれ発足した。大正13年（1923年）、本勅令は廃止された。

(7) 近現代（市制施行後）

昭和12年（1937年）、第5回冬季オリンピックの札幌開催が決まりましたが、日中戦争による国際情勢の悪化から、翌年には開催権の返上しました。

昭和16年（1941年）には太平洋戦争が開戦し、戦時下の札幌では、食料や生活物資の不足、女性の軍需工場への動員など市民生活に様々な影響があり、食糧難から大通公園は野菜畑として利用されました。昭和20年（1945年）7月14日、15日の北海道空襲では、札幌でも丘珠飛行場（現丘珠空港）や白石、東苗穂、手稲周辺で被害があり、死傷者を出しました。

終戦直後は狸小路や創成川の川岸に闇市ができ、生活必需品を求める市民が集まりました。一方、戦後間もない昭和25年（1950年）には、大通公園を会場に最初の雪まつりが開催され、まだ小規模ながら雪捨て場だった大通をイベント会場にする市民活動の端緒が見られます。

戦後、札幌市は、昭和30年（1955年）に札幌村、篠路村及び琴似町、昭和36年（1961年）には豊平町、昭和42年（1967年）には手稲町とそれぞれ合併し、市域は現在とほぼ同じ範囲に広がりました。また、この時代は、引揚者や疎開者の復帰、更に炭鉱離職者の流入など、北海道内の景気変動や産業構造の変化に伴う人口移動に出生率の向上も加わって人口が急増し、周縁部の農地等でも市街化が進みました。

昭和41年（1966年）に第11回冬季オリンピックの札幌開催が決定すると、大会に合わせたインフラ整備と建設ラッシュにより街の姿は大きく変わり、大会開催年の昭和47年（1972年）に札幌市は人口104万人の政令指定都市となりました。また、オリンピックの開催は、札幌の国内外での知名度向上や、国際都市としての市民意識の醸成など、今日の札幌につながる様々な変化をもたらしました。



札幌飛行場
札幌市公文書館所蔵



闇市（狸小路）
札幌市公文書館所蔵（複製）



札幌オリンピック開会式
札幌市公文書館所蔵



地下鉄南北線（ホーム）
札幌市公文書館所蔵

アイヌ民族をめぐる動き ～アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律の成立まで～

■同化政策の始まり

近世以降、本州などからの移住が本格化すると、場所請負制や、国の土地政策、同化政策により、アイヌ民族はその生活と文化に大きな打撃を受けることとなりました。明治政府が、それまでアイヌ民族が居住していた土地や、狩猟や採集など活動の場としていた土地を官有地に編入し、民間に払い下げると、生活基盤を失ったアイヌ民族は困窮を深めました。

■北海道旧土人保護法の成立

明治32年（1899年）、困窮するアイヌ民族救済のための法律として、「北海道旧土人保護法」が成立しました。この法律は、主にアイヌ民族の農耕民化と、日本語や和風の習慣の教育によって同化を進めようとするもので、農業に従事しようとするアイヌ民族に土地を付与する規定を設けたものの、実際に付与されたのは新規就農者には開墾が極めて困難な「未開地」であったため、アイヌ民族の生活向上につながる例は少数でした。また同法は、アイヌ民族の子ども達のための学校設置を規定しましたが、その後、学校でアイヌ語やアイヌ風の生活習慣を禁じたことは、アイヌ民族の子ども達が、それらを身に着ける機会を狭めることとなりました。

■民族自立に向けた活動

大正時代には、大正デモクラシーに象徴される社会の自由な雰囲気広がりと、アイヌ民族自身による、民族復権に向けた活動が活発になります。知里幸恵、遠星北斗、バチエラー八重子らの著作の発表や、知里真志保によるアイヌ語学研究は、アイヌ民族やアイヌ文化に対する社会的関心を高める契機となりました。



ジョン・バチエラー師の一家
北海道大学附属図書館所蔵

昭和21年（1946年）には、アイヌ民族の尊厳の確立と社会的地位の向上等を目的として、社団法人北海道アイヌ協会（後に、社団法人北海道ウタリ協会、現在は公益社団法人北海道アイヌ協会に改称）が設立されました。

■アイヌ文化振興法の成立

昭和59年（1984年）、当時の北海道ウタリ協会は、北海道旧土人保護法の廃止と、アイヌ民族の基本的人権の回復や差別の解消、教育・文化面における総合的な施策の実施等を定める法律の制定を、北海道知事及び議会に陳情しました。こうした活動は、平成9年（1997年）の北海道旧土人保護法の廃止と、協会が国に求めた内容のうち、主に文化に関する内容を反映した「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（「アイヌ文化振興法」）の成立につながりました。

■国際世論と国連宣言

1970年代半ば以降の、先住民族の境遇等についての国際的な関心の高まりは、先住民族の定義の確立を模索する活動（コーボ報告等）や、自己決定権をはじめとする先住民族の権利の保障等についての世論を喚起し、平成19年（2007年）には、国連総会において「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されます。国連宣言の翌年、日本の国会は「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を採択しました。



「国際先住民族年とアイヌ民族の人権」
シンポジウム
札幌市公文書館所蔵

■アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律の成立

平成31年（2019年）2月、アイヌ文化振興法に代わる「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が成立しました。この法律に初めてアイヌ民族を先住民族と明記したことは、アイヌ民族の地位向上への一歩との評価がある一方、土地や資源に対する先住民族の権利への言及がないなどの課題も指摘されています。

